

## 乳幼児の探索意欲と絵本との関係 —愛着形成との関わりと発語期—

浅木 尚 実<sup>1</sup>・佐々木 美 和<sup>2</sup>

### はじめに

領域「言葉」において、前言語期および発語期における保育者（養育者）との関わり（愛着形成）が、乳幼児の言語発達において特に重要である。白鷗大学教育学部論集第18巻1号において、「子育て支援と保育実践—絵本力とアタッチメント」では、人間関係の基盤（愛着・アタッチメント）の醸成において、絵本がどのような役割を担うのかというテーマで論じたところである。

同時に、そうした基盤（安全地帯）が形成されたところで、身体の発達に相似て、子どもは次に興味や関心のあるものへの探索（指さし行為からスタート）への意欲がさらに高まっていく。興味関心の旺盛な乳児期、特に1～2歳児においては、対象を指さし、それに名前があることを知る命名期であり、初語を皮切りに爆発的に語彙を獲得していく。

本論は、言葉を獲得する過程での、保育者（養育者）と関わりながら目にする絵本に、子どもの探究を促すもの（アフォーダンス）が含まれていると仮定し、愛着（アタッチメント）と探索との2側面から「絵本」がもつ言葉の発達を促す役割や力を考えていく。

---

<sup>1</sup>白鷗大学教育学部 <sup>2</sup>川口短期大学こども学科  
e-mail : n-asagi@fc.hakuoh.ac.jp

## 1. 乳児期の脳の発達

### (1) 出生～3歳まで

昨今、あかちゃん学 (Baby Science) が、今まで未解明であった乳児の脳の発達に関して、めざましい研究成果を遂げている。日本におけるあかちゃん学のメルクマークである「同志社大学あかちゃん学研究センター」の初代センター長小西行郎は、あかちゃんの脳内では、出生から3歳までの間に1秒ごとに700～1000の新しい神経細胞のつながりができ、それらは記憶、感情、行動、運動能力、言葉に影響すると指摘している。神経細胞のつながりとは、神経細胞のニューロンが脳の中で情報を受け取り、次に伝える働きをすることであり、ネットワークをつくり、脳の情報のやりとりが可能となる。神経細胞の中で、情報は電気信号となって伝わるが、シナプスとは、軸索と次のニューロンの樹状突起の接続をしている。このシナプスの数は指さしの時期である生後9ヶ月頃にピークに達し、その後、必要なものを残し、あまり使われなかったシナプスは刈り込まれていく。

神経細胞は、数が増えるとその性質の周りが鞘のようなものに包まれ、より早く情報のやりとりができるようになる。ゆっくりでいいものに関しての髄鞘化は起こらない。3歳頃になると、よく使うシナプスは太く強化され、周辺のシナプスを減らす。例えるならば、ごちゃごちゃした小道の代わりに幹線道路を通すようなイメージとなり、情報はよりスムーズに運ばれる。このように、神経細胞同士がつながり、スムーズなネットワークをつくることで脳内の整理が進み、より多くの情報を得る準備ができるのである。

### (2) 初期の言語環境

4歳頃、脳はほぼ育ち終えるが、初期の言語環境が豊かだと言語処理能力が速く、初期の言語環境が貧弱だと言語処理能力が遅い。建築家に例えると、家の設計図は立派でも良い材料と良い大工がいないと生かされないのと同じようなイメージである。

このような脳の発達において極めて重要な乳児期に子どもは、完全に周囲のおとなに依存する環境で過ごさざるを得ない。生理的早産であるヒトのあかちゃんは、他の哺乳類と比較しても未熟な状態で誕生し、放置されたらたちまち命を落とすような弱い存在である。周囲のケアするひとに命を預けていると同時に、その環境に強く左右されている。「泣く」というコミュニケーション手段しか持ち得ない子どもは、自らの「不快」の状態を「快」の状態に変えるよう周囲のおとなに訴えかけていくが、放置されれば、ストレスが生じ、ストレスホルモン(コルチゾール)が放出される。慢性的なストレスは、問題行動・健康上の問題・学習困難の誘因となる。

このように、ヒトのあかちゃんには、社会的栄養が不可欠である。周囲との愛着形成が安定を生み、後の人生の荒波を乗り越えられ、ストレスに前向きに対処できる耐性を育てることとなる。

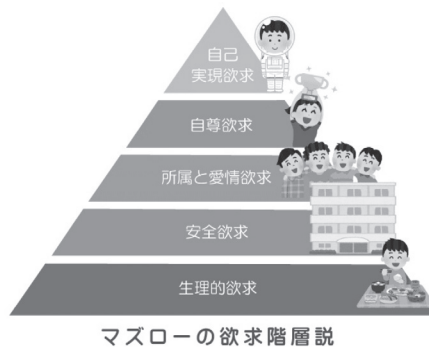


図1：マズローの欲求階層説

図1の「マズローの欲求階層説」は、人間の欲求を5つの階層に分けて説明した心理学の理論であるが、最下層の「生理的欲求」が満たされて初めて「安全欲求」につながっていく。次の「所属と愛情欲求」が愛着形成であり、乳児期における愛情に満ちた関係作りが重要となる所以である。

## 2. エンパワーメント

人生最初のこの重要な時期に、保育や子育てにおいて、愛着形成を基盤とした子どもとの人間関係の固い絆を形成することを皮切りに、生後9ヶ月頃に「指さし行動」が開始する。この行動は言語活動としてのコミュニケーションを意味し、三項関係の芽生えと同時に「探索行動」が出現する。

この時期、子どもの身近なおとなには、エンパワーメントによる働きかけが必要であり、子どもが本来持っている力を発揮できるように側面から支援することが求められる。高山静子は、『改訂 保育者の関わり の理論と実践』の中で、表1のように、側面から支援する際の8つの方法を提言している。

表1：エンパワーメントにおける支援（高山、2021）

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"><li>①能力を信頼する</li><li>②価値観を受容する</li><li>③自己決定を促す⇒自信</li><li>④体験と学びの場をつくる</li><li>⑤仲間</li><li>⑥周囲の資源を活用</li><li>⑦必要としている情報、技能の習得</li><li>⑧環境を整える</li></ul> |
|--|

また、初語が出現する1歳以降の保育所保育指針の基本的事項「1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容」では表2のように示されている。

表2：保育所保育指針：基本的事項「1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容」（厚生労働省 平成30年2月）

- |   |
|---|
| <p>(1) 基本的事項</p> <p>ア この時期においては、歩き始めから、歩く、走る、跳ぶなどへと、基本的な運動機能が次第に発達し、排泄（せつ）の自立のための身体的機能も整うようになる。つまむ、めくるなどの指先の機能も発達し、食事、衣類の着脱なども、保育士等の援助の下で自分で行うようになる。<u>発声も明瞭になり、語彙も増加し、自分の意思や欲求を言葉で表出できるようになる。このように自分でできることが増えてくる時期であることから、保育士等は、子どもの生活の安定を図りながら、自分でしようとする気持ちを尊重し、温かく見守るとともに、愛情豊かに、応答的に関わる必要がある。</u>（下線は筆者）</p> |
|---|

表2の下線で示したように、「自分の意思や欲求が言葉で表出できるようになる」この時期に、保育者は子どもの気持ちの尊重と「愛情豊かに、応答的に関わる」ことが求められているのである。そこで、愛着形成の基盤を白鷗大学教育学部論集第18巻1号「子育て支援と保育実践—絵本力とアタッチメント」にて提言した次の段階として、乳幼児期の探索意欲と愛着形成が密接に絵本と関連しているのではないかという仮説を立てている所以である。

### 3. 領域「言葉」における絵本の位置づけ

幼児教育や保育の活動において、児童文化財のなかで最も活用されているのが絵本 (picture book) である。〈絵やことば (文字) で表現された複数の場面から成立し、表紙から裏表紙まで読む人のリズムでページをめくりながら読み進めていくメディア〉<sup>i</sup>であり、〈主に子どもを読者対象として作られた本〉<sup>ii</sup>でもある。こうしたメディア (媒体) としての特徴にとどまらず、絵本を保育現場で活用する際のねらいや効果に関する言及も多い。また、文化的教育的な観点からその価値を語る記述も多く、首藤 (2019) によれば絵本は「精神文化」と「物質文化」を併せ持つ媒体であり、〈子供の興味関心や子ども期特有の認知と学習方略に合致していなければ、子どもを魅了しない〉<sup>iii</sup>。もとより美術や文学の領域からの研究もあり、絵本は多方面から多様にアプローチされる児童文化財であると言える。

本論は、乳幼児と絵本との関係について考察する。そこで、現行の『保育所保育指針 (平成30年)』に記載される「絵本」の位置づけについて先に確認しておきたい。

#### ○ 乳児

乳児期 (1歳児未満) においては領域ではなく3つの視点が掲げられるが、そのうちの2つが、保育内容の「言葉」領域に連なるものである。

イ 社会的発達に関する視点「身近な人と気持ちが通じ合う」

ウ 精神的発達に関する視点「身近なものに関わり感性が育つ」

イの視点はさらに「受容的・応答的な関わりの中で、何かを伝えようとする意欲や身近な大人との信頼関係を育て、人と関わる力の基盤を培う。」と解説され、具体的に3つのねらいと5つの内容、2つの内容の取扱いとして詳述される。「身近な人と共に過ごす喜び」「気持ちを通わせようとする」「応答的な触れあいや言葉がけ」「欲求が満たされ」「言葉の理解や発語への意欲」「次第に言葉が獲得されていく」「保育士等との関わり合い」「積極的に言葉のやり取り」といった表現は、発語を含む言葉の発達においてはアタッチメント（愛着形成）を基盤とする受容的で応答的な“特定のおとな”との関わりが重要であることを明確に告げている。

ウの視点の記述には「様々なものに興味や関心をもつ」「探索する」「自分から関わろうとする」「表情や手足、体の動き等で表現する」「様々なものに触れ、音、形、色、手触りなどに気付き」「手や指を使って遊ぶ」といった、子どもの表現意欲の育成にまつわるねらいや内容が多い。そして、内容の③に「保育士等と一緒に様々な色彩や形のものや絵本などを見る。」と絵本への言及がある。また、内容の取扱いの①に「安全な環境の下で、子どもが探索意欲を満たして自由に遊べるよう」に環境整備が必要であるとの記載もある。“特定のおとな”との関わりを通じて、乳児が興味や関心のままに探索し、それらを様々な仕方で表現（表情、発声、体の動きなど）する意欲を育てることが、乳児保育の意義として明示されている。

### ○ 1歳以上3歳未満児

1歳から3歳未満を対象とする保育活動のねらいや内容は、5つの領域に分かれて記載されている。「言葉」は言葉の獲得に関する領域であると位置づけられているが、5領域は重複を前提としており、保育内容として総合的に取り扱うことが厳に求められている。「応答的な関わり」「自ら言

葉を使おうとする」「言葉のやり取り」「子どもが自分の思いを言葉で伝える」「気持ちや経験等の言語化」など、乳児期の記載と共通するものも多いが、ここでは「絵本」の記述が複数回にわたり登場する点に着目したい。

### ねらい③

絵本や物語等に親しむとともに、言葉のやり取りを通じて身近な人と気持ちを通わせる。

### 内容④

絵本や紙芝居を楽しみ、簡単な言葉を繰り返したり、模倣をしたりして遊ぶ。

3歳未満児期までは、絵本は「読む」ものではなく「親しむ」ものとされる。そして、子どもが絵本を楽しむ際には、養育者や保育者等との“言葉のやり取り”を介することが期待されている。乳児期同様に、応答的な関わりと共に子どもの自発的な発語を促す働きかけを保育活動時に意識することも求められる。換言すれば、文字を読めない乳幼児が絵本の物語を享受するには、そのメディア的特徴から乳幼児と絵本の仲立ちをする養育者や保育者といった“おとな”が必要になるということである。

乳幼児にとっての絵本は、時に指でページをめくると異なる絵が次々に展開する“玩具”として、時に養育者や保育者に体を包まれながら同じページに目を向けやり取りする“本”として存在する。特に後者はアタッチメント（愛着）の形成に最適であり、アタッチメントはその後の子どもの言葉や認知の発達に大きな影響を与えることが知られている。こうした〈子どもと重要な他者との間の情緒的關係〉の程度を測る観察法が「ストレンジ・シチュエーション法」である。子どもの養育者（＝重要な他者）への愛着欲求と探索行動を一対で観察するもので、母子を対象に調査したエインズワース（1913-1999）は、その結果を以下の4つに類型化した。

回避型（A型）

愛着欲求をほとんど示さない。母親との分離に抵抗がなく、再会時にも喜ぶ様子を示さない。愛着形成が不安定である。

安定型（B型）

母親との分離には抵抗や混乱を、再会時には喜びを示すといった、必要な時に愛着欲求を示すが、落ち着くと一人で探索行動に移ることができる。母親が「安全地帯」として機能する。

アンビバレント型（C型）

母親に常時、愛着欲求を求め、探索活動ができない。母親との分離に強い抵抗や混乱を示し、再会しても機嫌が直らないこともある。

無秩序・無方向型（D型）

母親と子どもの関係が、A～C型のいずれにも分類できない。

養育者（母親）への接近や回避に見られるこうした愛着欲求の相は、当然ながら保育所を利用する乳幼児と保育者との関わりにも見て取ることができる。

前発語期にある乳幼児とは「三項関係」を意識した関わり方が求められる。『保育所保育指針』で繰り返し示される「人との関わり」や「伝え合い」は、コミュニケーション能力の基盤と言い換えられる。そして、乳児にとって意味あるコミュニケーションとは、目と目を合わせての〈三次元の立体的な世界のなかで行われ〉る〈互いに相手の様子を確認しながらのやりとり〉<sup>iv</sup>を指す。一冊の絵本（モノ）を乳児（子ども）と養育者や保育者（おとな）が共に楽しむ営みは、その伝え合いや関わりをより深く豊かなものにするだろう。

## 4. 乳幼児向け絵本

次に、こうした三項関係で用いられる乳児向け絵本の特徴とその役割について考える。前述のように、前言語期にある乳児にとって絵本とは、ぬいぐるみや積み木、テッシュボックスと同列の、触ったり見たり口に入れたりして楽しむ“玩具”として先ずは存在する。成立した乳児（子ども）と絵本（モノ）の二項関係に、第三者（おとな）が介在して絵本の文字（言



葉)を伝えたり、乳児からの発信を受けて語りかけたり、一緒にページをめくったりして“遊び”の時空間を共有する。単なる玩具(モノ)から絵本(テキスト)へと徐々に文化財としてのあるべき姿に移行していくのである。

1歳前後に多くの子どもが発語期を迎えると言われている。この時期によく用いられる「あかちゃん(乳児)絵本」は、構成的特徴から次の3つの型に大別できる。

出現/変容型:「いない いない ばあ式」と言い換えると明瞭だが、前のページと続くページで登場物は同じように存在するものの、姿や表情や形が変わっているもの。『いないいないばあ』(松谷みよ子・瀬川康男、童心社、1967年)、『だるまさんが』(かがくいひろし、ブロンズ新社、2008年)、『ぼんちんぱん(こどものとも0,1,2)』(柿木原政広、福音館書店、2010年)など多数。

移動/増減型:前のページと続くページとで主題となる登場物が移動したりその質量を変えたり増減させたりして展開するもの。『ひよこはにげます』(五味太郎、福音館書店、2021年)、『まるまるまるのほん』(エルヴェ・テュレ(作)・谷川俊太郎(訳)、ポプラ社、2010年)など。

消失/発見型:前のページの登場物が次のページでは消えていたり何かに擬態等して隠れていたりするもので、それを読者が見つけながら読み進めるもの。『きんぎょがにげた』(五味太郎、福音館書店、1982年)、『うずらちゃんのかくれんぼ』(きもともこ、福音館書店、1994年)など。

型が異なっても、乳児向け絵本には繰り返しが多いことが共通点であると言える。乳幼児は主に描画への興味や関心を指さしや発声や視線を向け

る等の非言語的な手段で伝えようとし、それに養育者や保育者は応答的に関わりながら絵本を介してのやり取りを楽しむのである。発語期にある乳幼児であれば、一緒に絵本を見ているおとなが発する文章から既知の言葉に気づき、自身で発語することもある。

前節で確認した『保育所保育指針』が掲げるねらいや内容に、こうした乳児絵本は合致する文化財である。中でも「消失／発見型」の乳児絵本は、お話の本筋から離れて、二者の間で“答え合わせ”をする瞬間を必要とする。この“答え合わせ”に向け、乳幼児は絵本を注視し、指さしなどしてページをめくる度に答えようとする。そして、その正誤に関わらず、絵本を読んでくれるおとなは自分に応答してくれる。正解なら「すごいね」「そうだね」との賞賛を、誤答であれば一緒に正答を求める楽しい探索活動が延長されるのだ。

## 5. 探索絵本の作品分析

「消失／発見型」の絵本はあかちゃん絵本に限ったものではない。特定の人物やモノを探したり間違いを見つけたりする絵本は子ども読者に人気であり、一大ジャンルを形成している。本論では、これらを「探索絵本」と名づけて括り、下記に6冊の絵本作品をその「探索要素」を分析しながら、本群の特徴を含め考察する。

○ 「きんぎょがにげた」五味太郎・作、福音館書店、1977年初出

屋内のテーブルに置かれた金魚鉢、そこに桃色の金魚が一匹入れられている。金魚は鉢から跳び出して逃げ出す。金魚鉢のあった家の中のあちろちらで、様々なものに化けては姿を隠すことを繰り返す。最後に、屋外にある大量の金魚が群れて泳ぐ水槽へと飛び込む、という筋である。



「きんぎょがにげた」福音館書店

空中を泳ぐ金魚の虚構的な面白さに加え、形状の似ている多種多様なモノに擬態してページ内に潜む金魚を、読み手である乳幼児は捜し出し、「ここ！ ここ！」と指さしや発声などを通して嬉々として報告したくなる工夫にあふれている。殊、三面鏡の場面は驚きに満ちている。文章の「にげた。」でページをめくり「どこに」の問いかけに応じて金魚を探す。このように、文章にも探索を促す工夫がある。

五味太郎による本作の後継作品である『ひよこはにげます』（福音館書店、2018年）は、「移動／増減型」絵本に該当するものである。ひよこも金魚と同様に逃げ出すのだが、それは読者の探索を促すのではなく、登場する3羽のひよこ自体が探索活動をしている絵本である。安全地帯から出発して安全地帯に戻るまでを描いた“お散歩”を描く。よって、読者が探索するという意味での「探索絵本」には含めない。



『ひよこはにげます』福音館書店

- 「うずらちゃんのかくれんぼ」 きもとももこ・作、福音館書店、1994年初出

鶉と鶏の母鳥雛鳥が一組ずつ登場し、雛鳥2羽が交互にかくれんぼ遊びをするもの。お決まりの「もう いいかい」「まあだよ／もう いいよ」のやり取りに続くページでは、一羽が野原のさまざまなモノに擬態して隠れている。それを、もう一羽が探すという筋である。この絵本を見る乳幼児も探し手となる雛鳥と一緒に、疑似的な“かくれんぼ”遊びに興じるこ



『うずらちゃんのかくれんぼ』福音館書店

ことになる。探索難易度も『きんぎょがにげた』よりも高く、途中でハプニングが発生するなど、お話（物語）の要素も十分に含んでおり、読み聞か

せの絵本として活用されることも多い。

また、本論では「消失／発見型」として取り上げるが、隠れていたモノが必ず自分から姿を現す展開は「出現／変容」としても捉えられ、雛鳥たちが野原を移動しながらも最後に親鳥の下へ戻る流れからは、“お散歩”絵本として「移動／増減型」にも該当する。しかしながら本作の肝は、雛鳥の擬態による“かくれんぼ”であり、それを見つけることが疑似遊戯であると捉え、「探索絵本」として取り上げた。

- 「コロちゃんはどこ？」 エリック・ヒル・作、松川まゆみ・訳、評論社、1980年初出

犬の親子（ママとコロ）が登場し、ごはんの時間に戻ってこない子犬を探しに母犬が家の中を巡るもの。しかけ絵本のためページを跨ぐことはなく、探す場所も「しかけ」のある家具などに限定される。しかけをめくると出現する形式なので「出現／変容型」（いないいないばあ式）にも該当するが、本作の主題が子犬探しであることから、こちらに含めた。



「コロちゃんはどこ？」評論社

先の2冊は乳幼児読者が自分自身で絵をじっくり見て隠れているものを探す絵本だが、本作は探す場所はすぐに提示され、読者はそれを確認するだけである。しかけ絵本のため、めくって遊ぶ要素（玩具性）が強く、めくって出現するモノに工夫と驚きがある。その意味では、絵本を玩具として楽しむ乳児向けの絵本であると言える。

- 「とこちゃんはどこ」 松岡享子・作、加古里子・絵、福音館書店、1970年初出

すぐに「とこことこかかだして、どこかへいってしまう」幼稚園就学前の男児“とこちゃん”を探す絵本である。1980年代から90年代にかけて世

界中で一世を風靡した『ウォーリーをさがせ！ Where's Wally?』（マーティン・ハンドフォード・作、フレール館、1987年）より早い時期に出版された「人探し絵本」として話題になったことがある。



『とこちゃんはどこ』福音館書店

ウォーリーもお決まりの目立つボーダー衣装であったが、本作のとこちゃんも祖母からもらった“赤い帽子（キャップ）”と“青色の半ズボン”が衣装の特徴として示され、それを頼りに老若男女ひしめく商店街や動物園、海水浴場、秋祭り、6階建てのデパートを舞台に、迷子探しをする展開となっている。1970年代日本の社会風俗がノスタルジックに感じられると同時に、いつの時代も変わらない子どもの姿が確認できる。加古里子らしく、見開きの2ページにめいっぱい背景と群衆を精緻に描いており、表紙と裏表紙の子どもたちが様々な集団遊びに興じる姿も目をひく。本書の対象年齢は3歳からとあるが、探索難易度もそれなりに高く、3歳児ひとりでは難しい。探索絵本の特徴として、読みの共同を促すきっかけを含む点も挙げられるだろう。

- 「おとうさん」 秋山とも子・作、福音館書店、1984年初出：瑞雲舎、2005年

ネームレス絵本であるが、見開き2ページに余白なく描かれるのは1980年代の東京である。戸建てと団地と学校がひしめき合うように並ぶ郊外とオフィスビルが建ち並ぶ都心を、満員電車の往復描写が繋げている。父親と母親、幼稚園児の長子と母に抱かれる乳児の4人家族が、午前7時5分に朝食をとるところから始まり、父親がバスと電車を乗り継いで職場へ出勤し、退勤してケーキを



『おとうさん』瑞雲舎

買い、午後9時台に帰宅するまでを17の場面で描いている。コマ割や俯瞰による描出もあり、「とこちゃんはどこ」と同じく人探しの絵本だが、人物の体格描写が均質なこともあり、父親の鶯色のスーツのみを手掛かりに捜し出すのはかなり難しい。実際、父親が顔を見せていない場面が2か所ある。お話（言葉）がないので、おとなが介在するにしても一緒に探索するしかない。しかしながら、父親以外に目を向けると、実にさまざまな相で当時の東京が描かれている。人々の服装や行動、店内の陳列物、乗り物、食べ物が多種多様に描き込まれており、子どもと一緒に見ながら当時の社会について語り合う教材として優れていると思う。

ちなみに、論者の手元にあるのは瑞雲舎の復刻本であるが、カバーや奥付に昭和59年初出であること、当時のありのままの社会の姿が今日の目には奇異に映る可能性のあることへの断り文が付されている。<sup>v</sup>

○ 「くらべるえほん たべもの」ちかつたけお・作、学研プラス、2022年初出

人や物を探す他に「違いを探す」タイプの探索型絵本もある。本作「くらべるえほん たべもの」に話による筋はなく、クイズや知育をねらいとする絵本であると言える。書籍購入時に付されていた帯広告にも、「観察力”や”考え方”を育む、「違いを発見する」絵本。」と記されている。見開きページの左右に写真画像と見間違



「くらべるえほん たべもの」  
学研プラス

えるほどに精密な食べ物の絵が1つずつ描かれ、「なにが ちがう?」「どこが ちがう?」との問いかけが付される。10の問いに答えるべく「何がどのように違うのか」をじっくり観察することを読者は求められる。すぐに回答できるものから、違いには気づけどもうまく説明できないような難問も含まれ、おとなの助言を介さずに子どもが絵本に対峙して時間をかけて探索することも可能だ。

裏見返しに、全ての正答とその詳細な説明が文章で掲載されている。その文体や漢字表記によりこの説明文がおとな読者を想定していることは明らかである。その意味で、本作は「探索絵本」ではあるが、上記に挙げた他の絵本とは、その出版の企図と使用する用途が、異なることがわかる。

探索の展開に特化せずとも、人や物、間違いを探す場面が作中に挿入される絵本は数多い。「14ひきのシリーズ」（いわむらかずお・作、童心社、1983年～）はその好例である。季節やイベントにより物語や背景描写は異なるが、途中でネズミの子どもを探す場面が挿入される。ネズミの14匹家族を、1匹ごと描き分ける作者の才に寄るところが大きいが、子ども読者はこの場面になると、一度お話の流れから離れて絵をじっくりと見ようしたり、読み聞かせ活動の場合は事後に絵本を自分で読み返したりする姿が想定される。

「11ぴきのねこシリーズ」（ばばのぼる・作、こぐま社、1967年～）の巻物絵本『11ぴきのねこマラソン大会』（改訂版：1992年、復刻版：2011年）もネームレス絵本であり、1992年のポーロニャ国際児童図書館展でエルバ賞を受賞している。この賞は現地イタリアの子どもたちが選出するもので、探索絵本の子ども人気に境



「11ぴきのねこ マラソン大会」  
こぐま社

界のないことを感じさせる。本作は大きな1ページで構成されており、折り畳まれたものを広げて複数人で一緒に見ることができる。他にも、令和の人気作である「おしりたんていシリーズ」（トロール・作、ポプラ社、2012年～）も「探索絵本」の要素を過分に持つ絵本・児童書のシリーズである。

このように、「探しもの」に特化した絵本は子どもに大変人気である。その筆頭が「ミック！シリーズ」（I SPY ミック！（1992年～）、チャレンジミック！（2005年～）、ちっちゃなミック！（2009年～））であり、

出版元の小学館によれば、国内累計販売部数が1,000万部を突破したとされる。<sup>vi</sup> 1冊ごとにミステリーやクリスマスといったテーマ設定はあるが、ページ間での繋がりや起承転結といった作品構成は無く<sup>vii</sup>、文章もほぼ探すものリストが占めており物語性は薄い。だが、この「ミッケ！シリーズ」は様々なモノが散乱する写真画像の中から、探偵よろしく依頼された調査対象(アイテム)



「I SPY ミッケ！」小学館

を探す行為自体に、探索絵本特有の「ごっこ遊び」展開や探索する過程で読者が独自の物語を紡ぐきっかけを含んでいる。

## 6. 絵本での探索活動の意味

絵本を用いた保育活動として、「読み聞かせ／読み語り」が子育て家庭や幼児教育・保育の現場で周知され励行されている。探索絵本は、「I SPY ミッケ！」を挙げるまでもなく、読み聞かせ活動には不向きのもが多い。なぜなら、文字(言葉)より絵の情報量がずっと多いからである。だからと言って、探索絵本が子育てや保育活動に適さないということではない。絵本での探索活動がどのような意味を有しているのか、「発語の促し」「愛着と探索の相乗」「想像力と読書行為への感興」の3点から考察する。

### ○ 発語の促し

前発語期における子どもの「指さし」行為は、その事物(モノ)と名前(言葉)とを繋げようとする兆しであるとされる。そして「指さし (pointing)」は「初期にはおとなからの指さしによる注視が起り、後に子どもの主導による指さしが出現する。」<sup>viii</sup>と従来、説明されてきた。だが、針生(2019)によれば、7,8カ月までのあかちゃんでは、おとなが指さしで対象物へ注意を向けるように促しても、そのおとなの指先を見つめるだけで対象物への注視には至らない、という。また、乳幼児自身が行う「指さし」もお



となの指さし行為とは異なるものようだ。指さしが見られる初期段階においては、他の人に気づかせたり伝えたりする意図で行うのではなく、自分が〈対象に注意を向けてそれを調べる行為に由来〉<sup>k</sup>する自己完結的なものである。

こうした興味や関心のあるものへ手を伸ばすような「指さし」に、周囲のおとなたちが応答し働きかけることにより、発声や表情変化などと同様に「指さし」も徐々に他者と関わる手法として体得するようになり、何かを伝えたり求めたりする時の仕草として定着する。そして、三項関係も構築されるようになるのである。

三項関係におけるおとなの役割について、佐藤・内山（2012）は、効果的な“絵本共有”におとなの介在が欠かせないと結論づけている。これは、絵本の活動にはおとなの存在が不可欠であるとした佐々木宏子（1977）<sup>x</sup>の主張を裏付ける内容であり、〈特に乳児期においては大人が子どもの注意を喚起するよう努力することで初めて子どもは絵本を楽しむことができる。子どもが絵本に興味を示すためには、常に母親の働きかけが必要になるのである。〉<sup>xi</sup>と考察する。

介在するおとなだけでなく、絵本それ自体も発語期前後の乳幼児に働きかけをしていると捉える考え方がアフォーダンス理論である。保育の用語辞典には〈あらゆる活動はそれを支える環境があって実現する。この「活動を支える環境の性質」をアフォーダンスと呼ぶ〉<sup>xii</sup>とあるが、認知心理学分野でギブソン（1904-1979）が提唱したのは〈環境が人間をはじめとする動物に対して与えている価値や意味。環境のさまざまな要素が動物に影響を与え、動物はその環境に適合した行動をとること〉<sup>xiii</sup>である。アフォーダンスは環境の性質ではなく、個々の生物にとっての環境の価値や意味というわけだ。常に環境の中に実在する人間を含む生き物が、その生活環境を探索することによって獲得することができる意味や価値であると捉え直すべきであろう。

よって絵本も、乳幼児の探索に際し提供（afford）する意味や価値を有

している。自然と能動性を促される探索絵本であれば、尚のことである。モノ探し絵本であれば、おとなは乳幼児が指さすモノの名称（言葉）を伝えるであろうし、乳幼児もその言葉を受けてそれが示すモノを確認すべく指さし等で応答し、それが繰り返される。三項関係は言語の獲得において非常に重要なコミュニケーションの基盤である。おとなと子どもが同じ対象に注意を向けて共有することを「共同注意」といい、三項関係の成立において重要な要因であるとされる。<sup>xiv</sup>

### ○ 愛着と探索の相乗

探索絵本に限定せずに、絵本での探索活動について考えてみたい。探索活動とは、〈周囲の環境や事物に対し、接近し、観察したり、手で操作したりすることによって情報を得ようとする行為〉であり、〈保護者との愛着が十分に形成されている場合、幼児は保護者を安心の基地として、周囲の環境に対し積極的に探索行動を行う〉。乳児の〈発見や驚きに、保護者は同意したり賞賛したりすることにより、幼児の自尊心が高まり、さらに活発に〉<sup>xv</sup>なる。また、〈探索活動は、認知能力の発達、自己概念の形成、言語の発達の基盤となると考えられて〉<sup>xvi</sup>おり、養育者との愛着と乳幼児の探索行動には大きな関連があることも知られている。

一般的な探索行動とアタッチメントが大きく関連するのであれば、絵本を読む行為自体が探索活動である「探索絵本」による絵本共有では、愛着はどのように位置

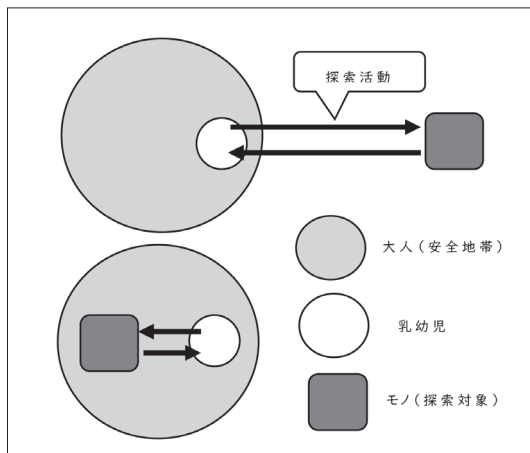


図2：愛着と探索のイメージ（佐々木作成）

づけられるのだろうか。「愛着と探索のイメージ」と題した図2の上部が、一般的な探索行動の流れを抽象的に表したものである。三項を円と四角形で、探索活動の動きを矢印で示した。探索活動に際し、安全地帯との分離を経験しつつも見守られていることを確認し、探索結果を伝えるべく安全地帯に戻る。安全地帯から離れて探索活動するイメージは身体的におとなから距離を置くことのみを意味するわけではない。探索対象に夢中になっておとな（安全地帯）の存在が一瞬消えてしまい、ふと不安になって振り返って確認したり声をあげて呼んだりする仕草も含んでいる。このおとな（安全地帯）とモノ（探索対象）を往還しながら、子どもは探索活動を継続していることが想定される。

下部の図は、「探索絵本」（モノ）で探索活動を行うおとなと乳幼児を表している。“安全基地内での虚構空間における探索活動”である。乳幼児は、養育者や保育者との分離への不安や抵抗を覚えずに、思う存分にやり取りを楽しみながら絵本の世界で探索できる。言い換えると、アタッチメントによる安心感と探索活動のドキドキワクワクを一時に享受できる一挙両得の状態である。探索型絵本に限らず読み聞かせの活動であっても、三者関係を基本とする乳幼児期の絵本活動においては常に、アタッチメントと探索活動が同時進行で行われる。

### ○ 想像力と読書行為への感興

では、物語絵本と探索絵本とでは何が異なるのか。

物語絵本は、幼稚園や保育所等の3歳児以上のクラスでは、複数児を対象に行う読み聞かせ／読み語り活動での使用が日常となる。幼児教育や保育の施設における絵本の読み聞かせ／読み語りは、集団で一冊の絵本の“絵”を見てその話を聞く形で行われ、物語世界に共感したり参加したりして楽しむ。集団対象であるから、話の進行は滞ることはなくページが戻ることもない。「じっくり見たい」や「前のページを再度確認したい」との個々の子どもの願いは叶わず、絵本探索の欲求を満たされない子どもが表れる

可能性が常在する。

他方、探索絵本は先述の通り、集団での読み聞かせ活動には不向きである。単数または少数で、絵の中の答えを探す読み方が必然的に選ばれる。3歳以上ともなればこの種の絵本に対しては、おとなの介入も求めず自力で主体的に探索しようとする子どもも現れるだろう。何より探索絵本は話の筋の有無にかかわらず、特定のページで留めてじっくり読むことも、前の場面へとページを戻すことも自由自在である。また、物語絵本の読み聞かせ／読み語りに比べ、絵本の“絵”を見入る時間が十分に確保される。作品分析でも言及したが、絵をじっくり見ることは、より深く絵本世界を探索できるだけでなく、ふと目に留まった背景描写の一部から、読者が新たな物語を想像するきっかけを与えてもくれる。

## 7. 今後の課題

乳児から幼児へと成長するにつれ、子どもの絵本との関わり方も変容していく。おとなの介入を前提とし、やり取りを通して絵本と親しむ乳児期と、集団での読み聞かせ／読み語りや友だち同士での読み合い、主体的に絵本を一人で読むこともある幼児期とでは、自ずと絵本に求められるものも変化する。今後は、幼児教育や保育における絵本を、読み聞かせ教材の枷から外し、その沃野の周知に努め絵本の可能性を探究することが、研究者に求められている。

### 参考・引用論文および文献

- ・浅木尚実 山路千華 鄭曉琳「子育て支援と保育実践—絵本力とアタッチメント」『白鷗大学教育学部論集第18巻1号』2024年3月
- ・高山静子『改訂 保育者の関わり方の理論と実践—保育の専門性に基づいて』郁洋舎、2021
- ・ダニエル・J・シーゲル『愛着の子育て』大和書房、2022
- ・浅木尚実『絵本から学ぶ子どもの文化』同文書院、2015
- ・佐藤鮎美、内山伊知郎「乳児期における絵本共有が子どもに対する母親の働きかけに及ぼす効果：絵本共有時間を増加させる介入による縦断的研究から」（『発達心理学研

- 究』第23巻第2号、2012年、pp.170-179)
- ・森上四朗、柏女靈峰(編)『保育用語辞典 第8版』ミネルヴァ書房、2015
  - ・谷田貝公昭(編集代表)『改訂新版 保育用語辞典』一藝社、2019
  - ・秋田喜代美(監修)東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター(編著)『保育学用語辞典』中央法規、2019
  - ・針生悦子『赤ちゃんはことばをどう学ぶのか』中央公論新社、2019
  - ・浅木尚実『絵本カ―SNS時代の子育てと保育―』ミネルヴァ書房、2023
  - ・佐々木美和「「おしりたんてい」人気を考える―今日の「読書」指導に関する一考察―」『川口短大紀要 第37号』2023年12月

### 採録した絵本(掲載順)

- ・松谷みよ子(作) 瀬川康男(絵)『いないいないばあ』童心社、1967
- ・かがくいひろし『だるまさんが』ブロンズ新社、2008
- ・柿木原政広『ぼんちんばん(こどものとも0,1,2)』福音館書店、2010
- ・五味太郎『ひよこはにげます』福音館書店、2021
- ・エルヴェ・テュレ(作) 谷川俊太郎(訳)『まるまるまるのほん』ポプラ社、2010
- ・五味太郎『きんぎょがにげた』福音館書店、1982
- ・きもとももこ『うずらちゃんのかくれんぼ』福音館書店、1994
- ・エリック・ヒル(作) 松川まゆみ(訳)『コロちゃんはどこ?』評論社、1980
- ・松岡享子(作) 加古里子(絵)『とこちゃんはどこ』福音館書店、1970
- ・秋山とも子『おとうさん』福音館書店、1984 ※復刻本:瑞雲舎、2005
- ・ちかつたけお『くらべるえほん たべもの』学研プラス、2022
- ・いわむらかずお「14ひきのシリーズ」既12巻、童心社、1983-2007
- ・馬場のぼる『11ひきのねこ マラソン大会』こぐま社、1992 ※復刻版:2011
- ・ウォルター・ウィック(写真) ジーン・マルローゾ(文) 糸井重里(訳)「I SPY ミッケ!シリーズ」全8巻、小学館、1992-2008

### 引用・注釈

- i 『保育学用語辞典』(2019) p.177
- ii 『改訂新版 保育用語辞典』(2019) p.33
- iii 『保育学用語辞典』(2019) p.294
- iv 針生(2019) p.70
- v 駅のプラットフォームや横断歩道を渡りながらの喫煙については、作者が断り文に指摘している。他にも、父親の勤務先で女性事務職社員だけが制服を着ていたり、そのうちの一人がお茶くみをしていたり、最初と最後にしか登場しない母親が家事と育児を一人で担っていたりと、隔世の感ある絵本であるのは事実である。
- vi 小学館ホームページ「ミッケ! 特設サイト」<https://www.shogakukan.co.jp/pr/mikke/> (2024年9月12日閲覧)
- vii 「I SPYシリーズ」に限ってはその通りである。「チャレンジ」には、シリーズを通じて“シーモア”という人形キャラクターが登場するので、その意味ではページ間での繋がりがあると言える。

- viii 『保育用語辞典 第8版』 p.299
- ix 針生悦子 (2019) p.99
- x 佐々木宏子 (1977) 「子どもにとって絵本とは何か」 日本児童文学者協会 (編)、日本児童文学別冊現代絵本研究 (pp.236-241) ほるぷ教育開発研究所
- xi 佐藤・内山 (2012) p.176
- xii 『保育学用語辞典』 (2019) p.121
- xiii 『デジタル大辞林』 (アフォーダンス項目)
- xiv 『改訂新版 保育用語辞典』 (2019) p.160
- xv 『改訂新版 保育用語辞典』 (2019) p.275
- xvi 『保育用語辞典 第8版』 (2015) p.69